Hirosaki University Hospital Bulletin
2007年（平成19年）9月25日

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：水沼英樹病院長補佐）
〒036-8563　弘前市本町53
TEL：0172-33-5111（代表）FAX：0172-39-5189
http：//www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

弘前大学医学部附属病院広報誌

南塘（なんとう）だより

第47号
（創刊：1994年12月15日）

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言～新外来棟開業を前に～

弘前大学医学部
附属病院長　花田　勝美

猛暑のなか，歴史ある大学ねぷたの運行も無事に終わり，ようやく落ち着きを取り戻しました。本年から，大学ねぷたは学内行事として認められました。ただ，今回は日程の詳細を周知徹底していなかった当方の不手際から，附属病院医師，看護師の参加が少なく反省しております。来夏はぜひ新任教授，看護部とくに新人看護師さんが家族ぐるみで参加されることを希望します。

さて，９月中旬に新外来棟の見学会がおこなわれ，いよいよ，来春１月の開業が実感されていることと思います。立案されてから長い年月を経ており，度重なる修正を余儀なくされてきましたが，その結晶ともいえるものです。これから「引っ越し」という大作業が待っています。幸運といえば，国立大学病院が財政的苦境に立たされているこの時代にともかくも「新築」できたことでしょう。不幸といえば，医療機器を殆ど更新出来なかったことです。まずは，現在の診療能力をそのまま移行するところから始めなければなりません。診療システムには従来経験したことのない要素が取り込まれています。ブロック受付が始まり，ようやく診療録の中央一括管理となります。このため，業務を担当する「病歴部」を新設いたしました。今後の外来診療録，従来からの入院病歴の管理を行います。臨床テクノロジーセンターもセンター側の強い希望から「ＭＥセンター」に名称を変更しました。今後の医療機器の管理，無駄のない共有に力を発揮してくれることを期待しています。絶体に機器を遊ばせてはいけません。互いに譲り合って効率的な運用をお願いします。新外来棟から眼を転じると，再開発が終了した病棟にも問題は山積していました。第一病棟は平成元年に竣功していますから，すでに19年を経ています。周知のごとく，とくに，患者さんとナースステーションを結びつける「ナースコール」の老朽化は極に達しています。さらに，各種滅菌装置の老朽化も重要問題です。直接診療行為には結びつかなくとも「医療の安全」のために自ら投資してでも実行しなければならない優先課題です。なにはなくとも速やかに実行すべく法人本部にお願いしているところです。今後，末永く地域医療の教育病院として存続するためには附属病院の経営難を打開しなければなりません。健全な経営なくしては診療はもとより教育，研究も成り立たないからです。対応策として，本院では診療報酬対策特別委員会を立ち上げ，外部からは経営コンサルタント（別項参照）をお招きしています。附属病院の将来のため，他大学に先駆けて改革案ならぬ刷新案を提示してくれることを期待しています。

（平成19年8月30日記）

各診療科の紹介【材料部】

材料部は，部長，副部長，看護師(2名)，看護助手（1名），外部委託者（11名，2名は手術部でセット組み立て），滅菌機器操作者（1名）の15名のスタッフで構成されています。材料部の業務は，医療器具・材料の洗浄・点検・組み立て包装，滅菌・滅菌器具の管理，そして衛生材料の作成・管理と多岐にわたりますが，業務の多くは外部委託者が中心となって遂行しています。平成18年度の滅菌・消毒件数は537,787件で，昨年より2倍以上増加しました。とくに診療部依頼の洗浄件数が131,496件，パック・セット組み立て依頼件数が57,705件と増加傾向にあります。診療時のセット組み立て依頼は約3倍に増加しており，今後も各診療科の要望に応えるべく努力していきたいと考えています。

材料部の使命は安全な医療器材を供給することです。とくに滅菌の保証が重要ですが，「滅菌はまず洗浄から」との考えの下に，洗浄評価用インジケータの導入等の新しい取り組みも行っています。安全な器材供給には洗浄機器，滅菌機器を定期的に保守点検することが望ましいのですが，予算の都合上，故障等のトラブル発生時に対応しているのが現状です。洗浄機器，滅菌機器はほぼフル回転で稼動しています。使用年数の経過とともに故障等も発生しやすい状況にあります。洗浄・滅菌機器の停止は，ただちに診療の停滞，患者サービスの低下につながります。病院管理課にはいつも迅速に対応してもらっていますが，定期的保守点検契約との費用対効果の比較も考えるべきでしょう。

医療材料に関して世界中で問題となっているのはリユース（再利用）の是非についてです。感染防御の観点からはディスポ製品がいいことは当然ですが，資源保護の観点からは再利用できるものは滅菌，リユースという考えが成立

します。滅菌の保証と器材の安全性をいかにして確保するか，今後も検討しなければならないと思います。

材料部の業務は多岐にわたりますが，業務毎に相互に連絡を密にし，確認，安全管理を心がけています。スタッフ全員で材料部としての質を低下させることなく与えられた役割を果たしていきたいと考えています。

（材料部長　奥村　謙）

新任教授の自己紹介

消化器内科・血液内科・膠原病内科科長
福田　眞作

この度，平成19年８月１日付けで，弘前大学医学部附属病院消化器内科・血液内科・膠原病内科を担当させていただくことになりました福田眞作と申します。

私は弘前大学医学部を昭和56年に卒業後旧第一内科に入局，同時に大学院に入学し昭和60年に学位を取得しました。その後弘前市立病院，鶴田町立病院，町立大鰐病院等で研修を行った後，平成４年より旧第一内科に勤務しております。平成10年には附属病院に新設された光学医療診療部の副部長として，新しい診療部の立ち上げという貴重な体験をさせていただきました。また，平成16年にはISO推進室長を命ぜられ，無事に日本品質保証機構によるISO9001認定を取得することができました。ご協力頂きました職員の皆様方に心から感謝申し上げるとともに，今後はISOに携わった経験を生かして，職場環境の改善に微力ながら尽力していきたいと思います。

消化器内科・血液内科・膠原病内科は，標榜の通り消化器疾患，血液疾患，膠原病疾患をそれぞれの専門家が担当しますが，その他心療内科も当科で診療を行っています。消化器内科は，悪性新生物の診断，内視鏡的治療，超音波ガイド下治療および炎症性腸疾患の治療を中心として消化器疾患一般の診療を行っています。血液内科は，白血病の治療を中心としていますが，様々な難治性血液疾患が紹介されてきます。膠原病内科は，関節リウマチを中心とする膠原病を対象としていますが，原因不明の発熱・関節痛で受診・紹介される患者さんが増えています。このように当診療科は幅広い領域の疾患と難治性疾患を担当しています。

医師不足の中，当診療科出身の先生方が地域医療を支えております。弘前大学医学部ならびに附属病院の発展はもちろんのこと，地域医療にも貢献して参りたいと考えております。今後ともご指導とご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

前立腺癌密封小線源療法開始

平成19年７月より，前立腺癌に対する密封小線源療法を開始しました。この治療法は，50～80個のヨウ素125シード線源を超音波ガイド下に前立腺内に永久的に埋め込む方法で，当院は県内初の実施医療機関となります。適応となるのは，前立腺内に限局する癌で，悪性度の高くない場合に限りますが，入院は数日で済み，手術と比べて侵襲が少なく，外部照射と比べて副作用が少ない点で注目を集めています。日本ではまだ始まったばかりの治療法ですが，治療成績は手術に匹敵することが海外で証明されています。

今後，前立腺癌は欧米なみに増えることが予想されており，本治療法の果たす役割は重要なものになると確信しております。なお，開始するにあたり，放射線科，泌尿器科，麻酔科，放射線部，病理部，看護部，総務課，医事課，管理課など，多くのスタッフのご協力を仰ぎました。この場をお借りして，皆様にお礼を述べたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

（放射線部副部長　青木　昌彦）

先憂後楽

神経内科の新たな発展

病院広報委員会委員
（神経内科）東海林幹夫

附属病院に赴任してから2度目の夏になります。今年は全国的に記録的な猛暑で，弘前も暑い毎日が続きました。今年のねぷたは通りから拝見し，津軽の人たちの夏に爆発するエネルギーと伝統的な優美さに感動する毎夕でした。

さて，神経内科も新しく診療科として出発して2度目の夏となります。昨年度の外来患者数（5,762名：新患539名，再来5,223名），入院患者数（3,383名）ともに大幅な増加があり，スタッフにとっても大変忙しい1年でした。ホームページの立ち上げ，年報の作成、教室や関連病院の整備，地域の先生方や県民の方々に神経内科をよく知っていただくための脳血管障害，認知症，パーキンソン病などの研究会，神経難病相談会など積極的に展開しました。

神経内科というとなかなか聞き慣れない名前ですが，脳，脊髄，末梢神経，筋肉の病気の治療をします。手足のしびれ，脱力・萎縮，めまい，頭痛，複視，もの忘れ，ふらつき，歩行障害，言語障害，意識障害などの症状は神経内科の病気が始まっていることを示しています。手術が必要な場合は脳神経外科と整形外科，心の問題は神経科精神科が診ますので，神経内科とはいわば兄弟の科となります。

青森県は脳卒中による死亡率が依然として高く，認知症や神経難病の診療やネットワークもこれからです。神経内科専門医は全国に比べて著しく少なく，また，ご存じのごとく研修医・医師不足のまっただ中にあります。このような中で，当科は青森県における神経内科の診療と地域医療・ネットワークの飛躍的発展と優秀な神経内科医の育成を目標にスタートしました。本年4月，弘前大学の卒業生が私どもの教室に加わりました。今後，スタッフとともにさらに診療，教育，研究のよりいっそうの発展を望んでおります。附属病院における神経内科の新たな発展に，どうぞ皆様のご支援をお願い申し上げます。

第１回弘大病院がん診療市民公開講座「切るガン・切らないガン!」開催

第１回弘大病院がん診療市民公開講座を「切るガン・切らないガン！」という主題で7月7日弘前文化センターにおいて弘前市の後援のもと開催しました。会場には300名弱の市民の方々が参加しました。まず花田勝美病院長から公開講座の主旨と情報公開する意義，さらに弘大病院が津軽地域の医療の中心であり，中央の医療レベルと遜色がないことをアピールした挨拶がありました。講演は，消化器内科・血液内科・膠原病内科の福田眞作准教授（当時）から「胃がん」について，消化器外科・乳腺外科・甲状腺外科の袴田健一准教授には「肝がん」について，心臓血管外科・呼吸器外科の對馬敬夫講師には「肺がん」について，最後に放射線部の青木昌彦准教授から「放射線治療」について分かりやすく講演をしました。このあと，パネル形式で質疑応答を行い活発な討論がなされました。会の締めくくりに佐藤敬医学部長から医学部としてもがん医療に積極的に貢献すること，ならびに最後まで熱心に参加されたことに対するお礼の挨拶があり，会は散会しました。

同時に実施したアンケートについて163名からの回答がありました（回答率約6割）。参加者は約8割が弘前市からで，女性がやや多かったようです。年齢構成は60歳以上で大多数を占めておりました。講演については，ほとんどの方が分かりやすかったと評価され好評でありました。同時に配布したパンフレットは分かりやすかったと答えた方が65%で，専門用語などが分かりにくいようでした。ほとんどの方が弘大病院のがん診療に期待していますと答えていただきました。なお期待していないという方は１人もおりませんでした。

第一回の市民公開講座に対し市民の皆さんから大変歓迎していただけました。市民に支持していただく病院として不可欠な事業であると思います。継続することで病院と地域住民の信頼の絆をしっかりとしたものにしていく必要があると考えます。

なお，自由意見の中には，スタッフの中には・・・・という言葉が散見しています。不適切な診療態度には病院全体で改善する努力が必要であると思います。

最後に演者の皆様には分かりやすい講演をしていただきましたことと，病院医事課，総務課の皆様には休日にもかかわらず公開講座をもり立てていただきましたこと厚く感謝いたします。

（放射線科科長　阿部由直）

「女性医師キャリアの継続」講演会開催

「女性医師キャリアの継続」と題した講演会を，去る7月20日(金)18時より医学部臨床大講義室で名古屋市立大学大学院医学研究科生体総合医療講座危機管理医学分野・准教授の津田喬子氏を講師に迎えて開催致しました。昨今，医学部の女子学生増加に伴い，医師全体に占める女性医師の割合は年々増加しており，本院もその例外ではありません。私の束ねる麻酔科においても教室員25名中9名が女性医師であり，その内2名が現在産休中，4名は子育てをしながらの勤務となっています。このため，男社会となっている旧態依然の病院の体質を変えなければ今後の病院運営は成り立たないと感じておりました。そういう意味で，津田先生の御講演は非常に有意義であったと思います。津田先生がお話されていた「男性医師は相手が女性だからと言って指導する際に遠慮して叱らないといったことがないようにする」ということと「女性医師側もプロフェッショナルとしての自覚を持ち，また医師養成のために自分に対して莫大な税金が使用されている事実をよく認識して将来設計を行う必要性がある」と言う点に深く感銘いたしました。我々はこの講演を機に，来年度から本格的に始まる24時間体制の大学附属保育所をいかに活用し，女性医師のキャリアを継続させるかを真剣に考えるべき時期に来たと思います。

（麻酔科科長　廣田和美）

リスクマネジメント講演会「病院経営と医療安全」開催

６月27日，リスクマネジメント協会理事・㈱フォーサイツコンサルティング代表の浅野睦先生を講師にお招きし，医学部臨床大講義室及び臨床小講義室において，リスクマネジメント講演会『病院経営と医療安全』が開催されました。今回は初の試みとして，毎回行う講演会のアンケートで「聴講に来ても，会場が狭く入ることができない」という声が多く寄せられたことから，臨床大講義室と小講義室を映像で繋ぎ，小講義室でも聴講できるよう設定いたしました。映像が見づらかったり，音声が飛ぶなど，次回への課題を残すところもありましたが，これにより，参加総数345名と，今までより100名以上多くの方が聴講可能となりました。

講師の浅野先生は，ＳＨＥＬＬモデルや多様な例を用い，リスクマネジメントの根本的なことから，思いこみが引き起こすインシデント，ヒューマンエラーなどについて，一時間という短い時間で，幅広くかつ丁寧にお話下さいました。時間の都合上数名に留まりましたが質問も受け付け，とても充実した内容で，職員からも，もっと聴きたいといった様子が窺えました。自分のエラーしやすい要因を思い起こし，これからの職務に活かせる良い講演会となりました。

（医療安全推進室）

新外来診療棟いよいよ竣功間近！

病院再開発事業は，昭和61年度から第一病棟，第二病棟，エネルギーセンター，中央診療棟の新・改築整備を順次実施，その最終整備事業として，平成16年度から外来診療棟工事を実施してきましたが，平成19年9月に竣功となります。

今後は，平成20年1月開院に向けて備品等の設置が行われます。

約2年半の工事期間中は，患者，教職員，学生等のご協力により無事完成することができました。紙面を借りて御礼申しあげます。

本建物の特徴としては，1階中央待合いホールを，４階までの吹き抜けとし，ミニコンサートや催し物のできる空間を構成していることです。各階診療ゾーンは，患者とスタッフ動線を極力分離し，各診察室の個室化を図り，医療環境の向上，プライバシーの確保を図っています。また、吹抜面に待合ゾーンを配し、南北にブロック受付を設け、各階は，中央診療棟，第二病棟と渡り廊下で接続することにより，一体的に使用できる施設となりました。

平成20年度以降は，既存外来診療棟の撤去，環境整備等を実施する予定です。

（施設環境部）

病院経営改革に外部コンサルタントの導入

本院の経営は，国立大学法人化以降，国からの予算が毎年減額されることなどから，年々厳しさを増し，特に今年度からは収支の均衡が取れなくなる状況に陥ることが予想されます。そのため，従前より進めてきた経営合理化をさらに推進するため「診療報酬対策特別委員会」を設置し，花田病院長並びに委員長である福田病院長補佐を中心に精力的に合理化・経費圧縮の方策を検討し，後発薬品の導入拡大など実現可能なものから即実行に移している状況にあります。しかしながら，内部からの経営改革では自ずと限度があるようにも思われます。

また，遠藤学長も常々本院の在り方，経営に危機感を抱き，打開策のひとつとして，外部の専門業者による医業経営コンサルティングを行い，現在の附属病院機構の刷新，経営改革へ向けての提案及び対策を受けることが必要であるとの認識を示されました。

これらのことを受け，本院ではコンサルティングを導入することとし，公募による業者選定を行い，７月から業務を開始したところであります。

コンサルティング業務としては、短期的な経費圧縮策から，中長期的な診療科の再編・地域医療との連携など新しいビジョンの策定です。その結果から，医業経営の安定が図られ，さらに本院が診療機能上「身の丈に合った」病院となることとなれば，コンサルティングの目的は達成されたこととなると思われます。

本院教職員の皆様には，コンサルティング業務にご理解を頂き，調査等に対して積極的なご協力を切にお願いする次第であります。

（経営企画室長補佐　岡崎耕衛）

新潟県中越沖地震で本院災害派遣医療チームが出動

平成19年7月16日に発生した中越沖地震に対して発災3日目に本院の災害派遣医療チームDMATが派遣され，新潟県柏崎市の救護所での診療と被災地の巡回診療を行いました。派遣メンバーは救急部長浅利靖，救急認定看護師山内真弓，医学部5年寺西智史，同石原佳奈の4名で陸路で柏崎市に向かいました。現地に入ると家は倒壊し，道はうねり，地震の威力に震撼しました。避難所の体育館内は30度を超える暑さで，この中で年配の方が横になっているそばを子供たちが元気に走り回っていました。救護所での診療は，切創，打撲，感冒などが主で，巡回診療では血圧測定や熱中症，食中毒予防の啓蒙などを行いました。被災地では，ご家族や家を失った被災者を前にして我々は常に自分達には何が出来るかを自問していました。この純粋な心は医の原点につながるものだと感じ，大変貴重な経験をしました。最後に犠牲になられた方のご冥福と被災地の早期復興をお祈りし，派遣に協力してくれました職員の皆様に感謝申し上げます。

（救急部）

院内コンサート開催

本院では，患者サービスの一環として院内コンサートを実施しています。４月，６月及び７月の３回，いずれも午後６時45分から外来待合いホールで開かれました。

４月27日（金）は「春のうた」をテーマに，バス・熊木晟二，アルト・猿賀智美，ピアノ・熊木美紀子のお三方の出演により開催されました。

６月８日（金）は「医学部管弦楽団＆医学部創立50周年記念アンサンブル」により「初夏の院内コンサート」と題して開催されました。

また，７月27日（金）は「夏のうた」をテーマに，４月に引続き熊木晟二氏らお三方を迎えて開催されました。今回も患者様が「四季の歌」を合唱するなど和やかなコンサートになりました。

（医事課）

弘前ねぷたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぷたまつり」が８月１日から７日間行われ，弘前大学のねぷたも大学と地域住民との交流を図ることを目的として，１日，３日，６日の３日間参加し、昭和39年に初参加以来，連続44年の出陣を果たしました。

初日には附属病院構内において，小児科に入院中の子供達や保護者，医師，看護師及び事務職員等による「小ねぷた」が運行され，子供達は太鼓と笛の音にあわせて「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ，津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。

（総務課）

【 編 集 後 記 】

残暑きびしきおり，南塘だより第47号をお届けします。

「この病院はフェアだ」という評判に勝る宝はない。先日，とある研修会で教わりました。８月３日に行われた広報委員会では，病院科長会議事録がホームページに掲載されることが報告されました。広報を通じた情報公開が，附属病院に対する評価向上の一助となる事を願いつつ，投稿して頂いた皆様に深謝申し上げます。

（広報委員　佐々木　賀広）